

はじめに

渡辺 昭一

21世紀に突入して間もなく起きた同時多発テロ事件（9.11事件）が世界中を震撼させたことは記憶に新しい。1980年代後半のゴルバチョフのペレストロイカからベルリンの壁崩壊さらにはソ連邦の解体へと続き、まさにその一連の事件は、20世紀的世界の基本構造をなしてきた冷戦体制が終結した瞬間であった。その後アメリカの一極支配が際立ってくると、マスコミをはじめ国内外における研究において、アメリカがあたかも「帝国」であるかのような論調が数多くみられるようになり、これまでの帝国の在り方を含めて、帝国とは何かということ問い直し始めるようになった¹。

2003年に出版された山本有造編『帝国の研究』名古屋大学出版会がそのブームのきっかけを作ったと言ってもよい。編者の山本氏は、日本近現代史の研究者でありながら、ベイリヤドイルなどの帝国論をモデルにして、歴史の横断的視点からのみならず通時的視点からさまざまな帝国の在り方を検討して、「帝国」の持つ類型²的特質を描き出した。また、2004年5月に一橋大学において開かれた歴史学研究会大会の全体会で「グローバル権力としての帝国」が取り上げられ、杉山正明氏（京都大学）と秋田茂氏（大阪大学）の報告をもとに帝国の在り方が論じられ、分科会においてもそれぞれの時代における「帝国」がキーワードして意識され問題が検討されたことによって、歴史の横軸だけでなく縦軸を意識した研究へと一歩進んだ³。

本特集は、こうした時代的要求を意識しつつ、執筆者の問題関心や研究領域が異なっても、それぞれの時代において存在した帝国との関連で、当該時期に見られた諸問題を探ろうとした論集である。以下、簡単に各論文の概略を紹介して、読者の理解を深めたい。

平田論文は、本来エトルスキ固有のものである臍卜占術 *haruspicina* が何故にローマ帝国において徴用され、そして、最終的に禁止されるにいたったのかについて、その原因を宗教的、政治的、社会・経済的側面から解明しようとしている。ローマは、王政期と共和政期を通じてエトルスキの影響を受けたが、特に卜占術が重要な要素であった。「臍卜師」

1 たとえば、山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』岩波書店、1996年；アントニオ・ネグリ & マイケル・ハート編『帝国』以文社、2003年；特集「帝国を読む」『現代思想』31-2、2003年；特集「帝国の生成と国民国家」『アソシエ』14、2004年；山本吉宣『「帝国」の国際政治学』東信堂、2006年等が挙げられる。

2 C.A.Bayly, *Imperial Meridian: The British Empire and the World, 1780-1830*, London, 1989；M.Doyle, *Empires*, Ithaca and London, 1986.

3 2004年度歴史学研究会大会プログラム。歴史学研究会は、同研究会編集の『歴史学研究』776号（2003年）と777号（2003年）に特集『帝国への新たな視座、』を掲載するとともに、歴史学研究会編『帝国への新たな視座』青木書店、2005年も発刊し、帝国への関心を喚起した。

Haruspices は元来臍ト占い haruspicina を行うエトルスキの占い師であったが、共和政ローマは、主要な国務の遂行に際して神々の承認を得るため、また天変地異に際してしかるべき手当を講ずるために彼らを重用し、「60人臍ト師団」を組織したり、彼らの『エトルスキ教典』をラテン語に翻訳したことを明らかにしている。そして、この haruspices は、帝政期においても重用されたが、キリスト教が国教となるに及んで、禁止されるに至ったことが論じられている。

谷口論文は、長江上流に位置した巴国をとりあげてその国家構造を復原し、中国古代における国家構造の一つの類型を提示することを意図している。中国古代の統一王朝といえば殷・周・秦・漢であるが、この四つの王朝の政治構造や社会制度はもちろん同じではなく、四王朝の政治構造や社会制度は、そのまま中国古代王朝の四類型を示すものとなっている。これらは、統一王朝ではないが、春秋戦国時代の列国も、それぞれ古代国家のある類型を示していることが論じられている。

櫻井論文は、普遍教会会議決議録のレヴェルにおいて、「帝国」としての「キリスト教国」の一側面を明らかにしようとしている。中世ヨーロッパ世界における二度の西ローマ帝国の復活（800年のフランク国王カールへの皇帝戴冠と962年の東フランク国王オットー1世への皇帝戴冠）から読み取れるように、中世ヨーロッパの皇帝たちが自らに「皇帝」imperatorの称号を帯びさせ、自らの支配領域を「帝国」とみなした。しかし、中世ヨーロッパの「帝国」は、「命令権」imperiumという政治上の職権に立脚する古代ローマの「帝国」とも、複数国家を様々なレヴェルで支配・統合することによって実現される近代以降の「帝国」とも、その性格を大きく異にした。中世ヨーロッパの皇帝に求められたのは、一方では「キリスト教国」Christianitasを外敵、すなわち異教徒から防衛することであり、もう一方ではその内部においても「平和」pax・「安定」quies・「協和」concordiaを体現することであった。あくまでも理念上の問題ではあるが、ここにおいて「帝国」と「キリスト教国」は相互に言い換えることが可能であり、逆説的ではあるが、「キリスト教国」の「平和」を実現するものが「皇帝」となりえる余地が、中世ヨーロッパ世界には残されていたことが論じられている。

原論文は、アングロ・サクソンのイングランドにおけるヴァイキング侵攻に関わるレプトン (Repton) 遺跡について検討している。「年代記」には、ヴァイキングの軍団が今日のダービシャー (Derbyshire) にある旧トレント (Old Trent) 川沿いのレプトンに防塁を築き越冬したとする記録が残されているが、ここを拠点とするヴァイキングの更なる侵攻は、やがてイングランドにおけるヴァイキング定住地域としての「デーンロウ地帯」(Danelaw) の形成の契機となり、その後さらにクヌート王 (Cnut, Canute) による「北海帝国」の形成をもたらす重要な歴史的事実となったことを明らかにしている。

楠論文は、テューダー朝で勃発した北部諸州の乱で登場した「コモンウェルス」という用語の持つ意味を検討した論文である。北部諸州の乱とは修道院解散を契機としたヘンリ8世時の大反乱のことであるが、反乱軍は恩寵の巡礼と自称し、反乱の正当性を示そうと

した。そのなかで、反乱軍は自らの行動を「コモンウェルスのための巡礼」と述べている。この「コモンウェルスのため」という表現を手がかりに、当時の「コモンウェルス」「ウェルス」「ウィール」という言葉を、テキスト・マイニングの手法を用いて、*Letters and Papers*, 28 vols. と Edmund Dudley の *The Tree of Commonwealth* をもとに追求している。当時はヒューマニストによって主張された社会有機体説に基づくコモンウェルス論が一般的であり、コモンウェルスのための実力行使は極めて異例の用法であったことから、この反乱は到底一般の理解を得るには程遠く、暴力性が強調されて悪魔の反乱として歴史書で断罪されることになったことが論じられている。

森脇論文は、ヴェブレンの著作 *Absentee Ownership* (『不在所有論』(1923)) を取り上げ、「資本主義」の生成・展開・変容についての主張を検討してその特徴を明らかにしている。現下の世界恐慌的状况を引き起こしたのは、金融利害中心の企業行動が製造業・産業を犠牲にしかつ歪め、それらを利益獲得の手段としか捉えないアメリカの経済体制であると、ヴェブレンはこのアメリカ経済の特質を逸早く見抜いていた。不在所有 = 法人企業・株式会社の追求する「金儲け」と機械制産業・製造業の「物作り」とを一貫して峻別して論じ、法人企業・株式会社の活動の金融化・金融偏重が惹き起す経済・産業の変容に注目するのは、彼の独自の見地である。アメリカ帝国論に与える彼の示唆は、極めて重要であると論じている。

渡辺論文は、第二次世界大戦後の南・東南アジアにおける新国際秩序形成において重要な役割を果たした経済開発計画「コロンボ・プラン」の具体的内容とその特徴を明らかにしようとしている。第二次世界大戦後に脱植民地化 = アジア諸国の独立が開始されたことを受けて、イギリスは、帝国解体後の影響力の行使手段としてコモンウェルス体制の再編を行おうとした。軍事的支配をもはや望めない状況下において、経済的に引き続きアジア経済に関与しようとして、「コロンボ・プラン」を開始した。この計画は、アジア側の潜在的な経済発展力と経済支援額の枠組みを確定する作業であったが、イギリスと並んで、新たなリーダーとしてインドやオーストラリアが台頭する基盤を与えたことを検討している。

なお、この研究の推進に当たって、平成 19 年度東北学院大学共同研究助成金（研究代表：渡辺昭一）の補助を受けたことを記して、謝辞としたい。